

アクティブラーニングの視点に立った教科教育指導 ： 高等学校「課題研究」～KJ法分析による意識の変 容とその成果について

著者	能勢 保幸
雑誌名	北翔大学北方圏学術情報センター年報
巻	9
ページ	79-88
発行年	2017
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002603/

研究報告

アクティブラーニングの視点に立った教科教育指導 —高等学校「課題研究」～KJ法分析による意識の変容とその成果について—

能勢 保幸

北翔大学北方圏学術情報センター学外研究員

抄 録

各専門分野に関わる実践的な学習は、専門高校で様々な形態で行われている。2016年8月に示された次期学習指導要領改訂の方向性として、実践的な学習の重要性が一層強調されている。そのキーワードは、教育課程を編成する際の中心的理念として捉えられた「社会に開かれた教育課程」という理念と、その理念を実現するための具体的な教育方法として注目される「アクティブラーニング」である。

専門的な知識・技能の活用に関連して、ここ数年衆目を集めているのは「アクティブラーニング」である。特に高等学校の授業改善が強調され、授業においてグループ学習や、発表・討議などが積極的に取り入れられるようになった。アクティブラーニングの視点は「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つに整理された。

本研究は、アクティブラーニングの視点に立った授業実践を試みることによって、これらの視点から授業や教育課程を見直すことで、生徒にとってより質の高い理解や、将来に繋がる学習の一助となると考え、「課題研究」の授業実践を通して生徒の意識がどのように変容しそのことがどのような効果をもたらしたのか、それによって何が身に付き何ができるようになったのかを探究する研究である。高等学校「課題研究」の授業でアクティブラーニングの三つの視点を取り入れた授業実践を通して、生徒自身が自ら課題を設定し、主体的に調査を行い、調査研究を実践する中で深い学びが実践され、調査したことを発表することによって生徒の発信力や発言力が身に付き、グループ討議を行うことで対話的な学びが実践され、アクティブラーニングの三つの視点を網羅した授業実践ができるものと考えられる。

調査研究を通して生徒の意識は顕著に変容した。本研究を通して生徒の主体性、深い学び及び対話的な学びが実践され、社会人として時代の変化に対応できる素養が形成されたのではないかと考えられる。今後、調査研究で学んだことを有効に活用し、社会人として主体的・能動的に生きていくことができるものと考えられる。

キーワード：調査研究、生きる力、主体的探求心、能動的な思考への転換、内面的プロセスの質的向上

I. はじめに

我が国の今後の教育動向を見ていくと、文部科学省が学習指導要領改訂において、実践的な学習の重要性をより一層鮮明に強調されていることが理解できる。その理念の実現のための具体的な教育方法として注目されているのが「アクティブラーニング」である。

このアクティブラーニングについて、平成24年8月に

中央教育審議会の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」の中ですでに記述されている。その際には、能動的学修（アクティブ・ラーニング）と括弧書きで記載されている。これは「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」とされている。

現行学習指導要領に盛り込まれた言語活動や体験活動、探究学習、ICT（情報通信技術）を使用した指導の

現状を踏まえ、こうした学習をさらに充実させようとしている。児童・生徒が自ら設定した課題について、インターネットなどを利用して調べた成果を持ち寄り、論議や発表をすることにより、思考力・判断力・表現力や他者と協働して問題を解決する力や学ぶ意欲を育むことができる」とされる。

アクティブラーニングは、学生が主体的に問題の発見と探求と解決を行うことが求められる大学教育で先行して実践されてきた。これを初等・中等教育段階から取り入れ、知識伝達型授業・暗記型学習を脱却して、アクティブラーニングが必要とされ、社会人として時代の変化に対応できる力を身に着けるように実社会で活用できる汎用的な能力を育成することを前提としている。

この汎用的な能力は、学びのプロセスの中で身につく、論理的思考力やコミュニケーション能力などの力が育成される。また、知識の質や構造が問われるようになり相互交流の多い思考・発信型の授業が行われることで、構造化され、精緻化された知識が子どもに形成される。このようにして獲得された知識は有効性が高く、安定して記憶に残っていく。アクティブラーニングを通じて、学習意欲が持続的かつ恒常的なものとなり、困難があってもそれに立ち向かう力や主体的に学ぶ力が育まれると考えられるのである。

Ⅱ. アクティブラーニング

1. アクティブラーニングの定義

現在、日本の高等教育機関では、アクティブラーニング（以下、AL：Active Learning）の手法が取り入れられている。このALについて文部科学省用語集では、次のように記述されている。「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加をとりいれた教授・学習の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブラーニングの方法である。」

溝上（2014）⁴⁾は、ALとは、「一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」と定義している。さらに溝上は、その定義を「教えるから学ぶへのパラダイム転換」とであると述べている。ここでいう能動的な活動と

は、書く・話す・発表するなどの活動を学習に採り入れ、それに関与することによってさまざまな認知機能を働かせ、そのプロセスを外化することを意味している。これは、社会の変化の対応としての認知機能の育成、すなわち技能・態度（能力）の育成という課題が込められている。

他方、山田（2013）³⁾は、ALを「ディスカッション、学生のプレゼンテーションによる双方向対話型授業、あるいは学生自ら資料や文献を探し、授業の事前・事後の学習に関わる等も含まれる」と定義している。

また、小川（2012）⁵⁾は、ALを「能動的な学習のことで、授業者（教員）が一方的に学生に知識伝達をする講義スタイルではなく、学生が将来社会で求められる能力の基盤となるジェネリックスキルを内発的動機づけに駆り立てられながら学習できるように学習内容と方法、そして、環境を準備し、「学生は授業を通して何ができるようになったのか」を基準にして授業計画を考える学修スタイル」と定義している。さらに具体的には「課題研究やプロジェクト・ベースド・ラーニング（PBL）、プレゼンテーション、ディスカッションなど、学生の能動的な学習を取り込んだ授業を総称する。」と定義した。

2. アクティブラーニングの三つの視点

中央教育審議会教育課程部会より出された「審議のまとめ」（2016年8月26日付）より、アクティブラーニングの三つの視点が次のように明示された。

平成28年5月9日付の教育課程部会高等学校部会において、「主体的・対話的で深い学びの実現」について答申が出された。「主体的な学び」は、子どもたちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動をふりかえって次に繋げる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。「対話的な学び」は、他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程ができていくかどうか。「深い学び」は、習得・活用・探求というプロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか。以上が三つの視点の具体的内容である。

これらの三つの視点について、本所（2016）¹⁾は次のような独自の視点で表現している。

「主体的な学び」は、長期的には生徒が自分のキャリア形成と関連づけながら学習を進めること、そして短期的には、学習過程の一場で自分の学習活動を振り返って現在の到達点を確認し、次の活動を進めていくこと。

「対話的な学び」は、生徒同士をはじめとして人々と対話する中で自分の考えを広めることであり、重要なことは学習イメージの転換である。これは、一人で知識を吸収する勉強だけでなく、人の考えを聴いたり自分の考

えを表現したりすることが大切である。そのためには、生徒が考え議論するに値する課題を示していくことが大切になる。

「深い学び」は、知識を単独で覚えるのではなく、他と関連付けたり、現実の場面で使ったりする中で実践されるものである。そして、これらの三つの視点は、現実には一つの学習過程の中に複合的に表れる。

これらの視点から授業や教育課程を見直すことは、生徒にとって質の高い理解や、将来につながる学習の一助となる。学校での学びを通して、社会生活の中でも学習の契機をつかみ、人々との対話の中で自分から積極的に学び取れるような能力を身に付けているといえる。

また、文部科学省初等中等教育局の田村（2015）²⁾視学官は、2030年の社会とその先の社会に生きる子どもに、どのような資質・能力の育成が必要なのか、と問うている。能動的学習形態の一つの方法として、アクティブラーニングが必要であること、知っていることやできることをどのように活用あるいは発信していくのか、そして教育課程の構造化へとつなげることを念頭に、より効果的なALの導入実践が必要とされる。

論点整理における授業改善の三つの視点は、プロセス、インタラクション（相互作用）、リフレクション（振り返り）が、適切に学びの中に位置づけられるかどうかことが重要であり、これらの三つの視点で授業を改善することで、今まで以上に高度化された学力の育成が期待できる、としている。

3. 全国高等学校でのアクティブラーニングの実態

平成27年12月に実施された東京大学総合教育センターと日本教育研究イノベーションセンターの共同調査研究での発表において次のように示している。

教科別アクティブラーニングの視点に立った参加型授業の全国の実施状況をみれば、国語、外国語、地歴、公民、理科、数学の順に実施率は低くなっており、参加型授業に対する学校現場の教員の意識が、教科ごとに異なっている可能性が示唆されている。今後、アクティブラーニングの視点からの不断の授業改善を進める上での校内研修や授業づくりの実践的研究が重要な課題であることがみてとれる。

この調査の因子分析の結果から、高等学校で実践されている参加型の学習活動は、理解深化型、探求活動型、意見発表・交換型、社会活動型、芸術・創作活動型の五つに分類されるとしており、理解深化型、意見発表・交換型、の活動を進めている教員が多く、それらの学習活動は、思考・表現力、課題解決力、社会的スキルというねらいと関連していることがみてとれる。

アクティブラーニングの視点に立った参加型授業を5

件法にて回答した結果、「そもそも効果を感じている？」という設問に対して、教科主任、学校代表のいずれも「自分の考えを深める力」「生徒・教員間のコミュニケーションの深化」「コミュニケーション能力」「考えを言語で表現する力」「他者と一緒に学ぶ楽しさ」の上位5つは、3.6から3.8の評価が得られており、主体的・協働的な学びには効果的であるとの認識を示している。

4. 専門高校でのアクティブラーニングへの指針

平成28年2月の教育課程部会（産業教育WG資料7）では、資質・能力の三つの柱に沿った職業に関する専門教科において育成すべき資質・能力の整理の中で次のように示している。

それは「個別の知識や技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」が産業教育全体に求められている。具体的内容は、一点目は、各職業分野で求められる基礎的・基本的な知識や技術、各職業の社会的意義や役割の理解。二点目は、各職業分野に関わる課題に対して職業人としての倫理観を持って主体的・協働的に取り組み合理的かつ創造的に解決する能力。三点目は、産業・社会を支える職業人として必要な豊かな人間性、産業の振興や社会に貢献しようとする態度、社会の変化に対応して学び続ける態度である。

生徒の学ぶ意欲を高めるためのアクティブラーニングと将来の社会生活における実践力、応用力を高めるためのキャリア教育充実に取り組む必要性がここにあると考えられる。

Ⅲ. 研究目的

文部科学省教育課程部会の指針や先行研究などからアクティブラーニングの意義や重要性を考慮し、本研究は高等学校の科目「課題研究」において、講義形式の形態ではなく、生徒の主体性を育成し、生徒が能動的に授業に取り組む授業形態、すなわち学習者中心の教育、生徒は何かできるようになったのかを探るために主体的・協働的・深い学びに結び付く授業実践を試みた。

筆者が実施した「課題研究・調査研究」の授業は、課題探究型であり主体的・能動的に学修する授業である。主体的で対話的で深い学びを通して、何が身に付き何ができるようになったのか、つまり、課題探究型の調査研究の一連のプロセスを経験することによって、「個別の知識や技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」が身に付くことを目標としている。

アクティブラーニングの視点に立った授業を通して生徒の意識の変容、何が身についたのか、そのことが生徒の成長や有能感にどう繋がったのかをアンケート調査と

レポート及び研究発表、グループディスカッションによって明らかにすることが目的である。

Ⅳ. 研究 方 法

1. 研究対象者

北海道内に在る高等学校で商業科目「課題研究」を選択した3年生、37名が対象者である。この37名の生徒は高校卒業後、就職する生徒が主である。専門高校（商業・工業・農業・水産業）での「課題研究」は、資格取得、調査研究、作品制作などから構成されており、対象校では「資格取得」及び「調査研究」から構成されている。「調査研究」は、生徒自らが課題を設定し、その課題を解決することが目標である。

1年間を通して、前半は資格取得のため、検定1級合格目指して授業を実施する。後半は、調査研究に取り組む。

資格取得は、講義形式で授業を展開する場面があるが、生徒が主体的に取り組めるように、当初、基本的な問題の解き方は一通り説明するが、その後は生徒自身が問題解決の為に生徒相互で教えあうなどの形を取り入れている。

本研究の主旨は資格取得ではなく、後半の調査研究についてのアクティブラーニングの視点に立った授業実践なので、資格取得についての説明は簡略する。

調査研究の実施期間は、8月から12月であるが、夏休みや学校行事などのため実質4か月程度の期間である。

2. 調査研究の授業計画

1) 第1週：オリエンテーション

1週間の授業時間は3時間である。第1週目にオリエンテーションを行い、課題研究・調査研究の意義と内容を伝える。生徒自身が今最も興味関心がある分野について、自問し、テーマを決定する。具体的には、商業全般、経済・経営、マーケティング、金融、法律、情報、簿記・会計など幅広い分野から一つだけ仮のテーマを決定する。テーマを決める際には、生徒自身が今最も興味関心がある事についてインターネットや書籍、新聞・雑誌などを検索して決定する。何故そのテーマに興味があるのか、疑問点は何か、何を明らかにしたいのか、どのような方法で調査したいのか、を整理する。

2) 第2週から第3週：テーマ決定、調査開始

テーマを決定した生徒は、教員側が用紙したプリントに記入・整理し一度教員に提出しアドバイスを受ける。

その後、具体的な調査を開始する。インターネットや

書籍などの媒体を利用する。調査したことをノート（マイノートを1冊用意させる）に記述する。

- ① 調査したいテーマの鍵となることから調べる。
- ② テーマに関する事項をできるだけ詳しく調べる。
（ここで 調査したことが後にテーマ決定へと繋がる場合もある。）
- ③ 調べていく過程の中で、疑問点が生じたり、あるいは、興味関心がさらに深まることがあるので、それらを具体的にノートに記述する。
- ④ 調べた本、新聞、参考文献などは、著者名、出版年月日、出版社名など必要な事をメモしておく。

3) 第4週から第6週：レポート作成

研究テーマの調査内容を作成したマイノートを基にレポートを作成する。起承転結を考え、調査目的、調査内容、結果と考察、今後の課題の順でレポートを作成し完成する。

4) 第7週から第8週：レポート提出とリフレクション（振り返り）

調査研究レポートを提出し教員からアドバイスを受ける。教員との面談を一人一人行う。この時の面談は、レポートの添削が中心ではなく、調査した内容と、まとめと考察で何が明らかになったのかを聞くことが中心である。生徒自身がまとめた研究内容について、振り返らせることが目的であり、質疑応答できちんと答えられるかを確認する。調査したことがきちんとまとめられ自分の言葉で表現できるかの確認である。

5) 第9週から第10週：研究発表のための資料作成

研究レポートがほぼ完成した生徒は、プレゼン発表用の資料をパワーポイントで作成する。

6) 第11週：資料完成と研究発表準備

プレゼン資料の完成と研究発表の準備を行う。

7) 第12週から第15週：研究発表

自ら決定したテーマについての調査研究結果を全員の前で発表する。研究発表は、個人（一人）で発表する。発表時間は一人8分以上10分以内とする。一人の発表に対して残りの36人は視聴することになるが、発表ごとにプレゼンテーションレスポンスシートに記入し、評価項目による評価を相互に行い、良かった点改善すべき点について発表を聴きながら記入する。

8) 第16週前半：グループ討議（リフレクション）

課題研究・調査研究で実施してきた一連のプロセス

(テーマ決定から発表に至るまで)についてグループ(各グループ7人から8人、全5グループ)毎に、振り返る。

グループ毎に司会、書記、発表役を決め、研究発表の内容などを中心に振り返り意見等をまとめる。

9) 第16週後半：グループ発表

最後に、5つのグループでそれぞれ振り返ったことについてその代表者が皆の前で発表する。

10) 第17週：卒業課題レポート作成

卒業課題レポートの作成。調査研究で行った一連の学習研究発表、グループ討議など結果や成果、意識の変化、将来への活用を叙述化(文章化)する。

3. 調査方法

質問調査紙(4件法選択式及び記述式)、振り返りシート、研究発表、グループ討議(グループディスカッション)、卒業課題レポート

V. 研究結果

アンケートは、1) レポート完成後の振り返りシート、2) プレゼン資料作成後の振り返りシート、3) 研究発表後の振り返りシート、4) 研究発表、5) 卒業課

題レポートの5点を分析対象とした。

1. 分析手続き

今回の課題研究で実施したアンケート調査用紙(フィールドノーツ)から、記載内容の傾向の高いキーワードと考えられる文言を抜き出した。具体的には、生徒の意識の変化や能動的な活動が見られた点、将来のキャリア発達に向けてどのように気持ちに変化が表れ生きる力へと繋がったのか、それぞれキーワードとなるものを抜き出しそれらを切片化した。

記述式のアンケート調査の結果をKJ法(川喜多, 1986)に準じて分類・解析することとした。

まず、アンケートのデータから必要と考えられる全てのキーワードを項目ごとに分け、ラベルを付与し、グルーピングを行った。グループとしてまとめた結果を切片化する段階でラベル名・グループ名及びグループ編成の練り直しと修正を重ねた。グルーピングした結果の繋がりを考えて、図としてまとめて(構造化)それらを基に文章化(切片化)した。

2. 結果と考察

研究結果は、選択式(4件法)及び記述式のアンケート調査用紙を総合して判断し分析対象とした。

記述式のアンケート調査用紙は、質的研究の一つであるKJ法によって構造化し、分析対象とした。KJ法によ

KJ法による構造化

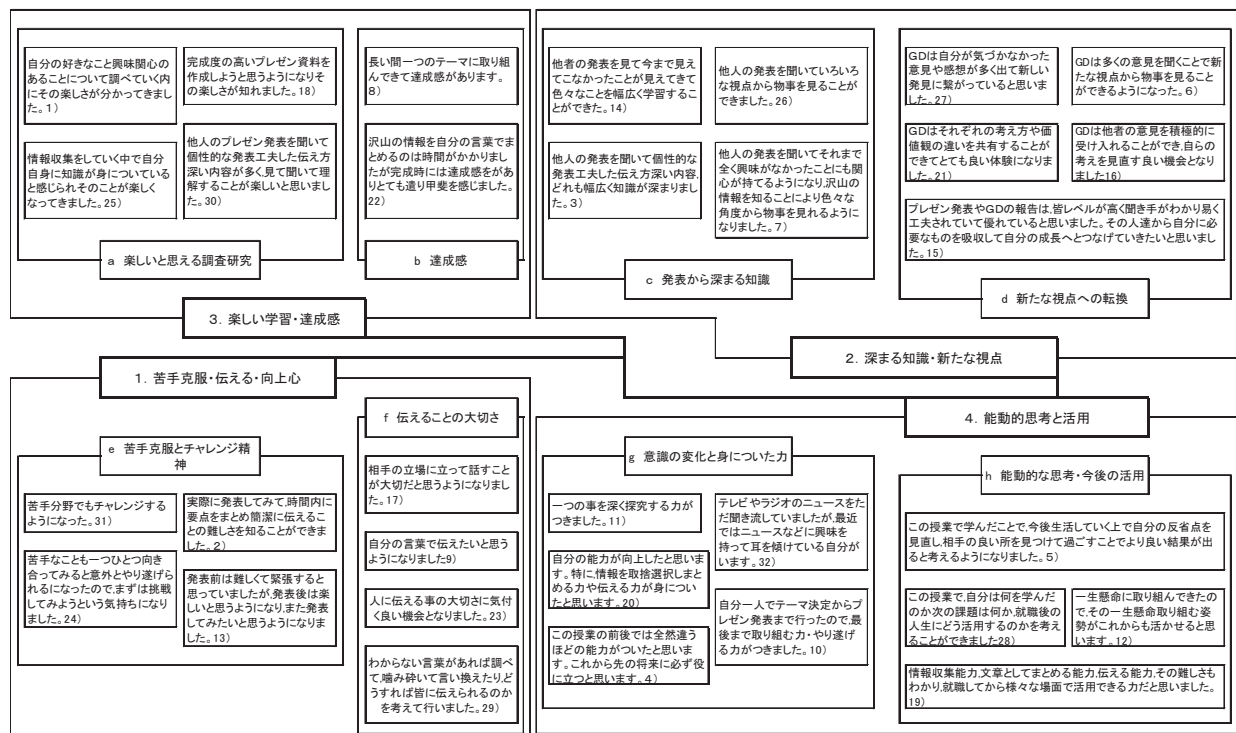


図1 KJ法による分析結果

る構造化の分類は図1の結果となった。(図1参照)。

選択式アンケート調査用紙の結果は、次のような結果となった。(表1参照)。

これら二つのデータから生徒の意識の変容とその成果

について分析し考察した。

調査結果の分析は、主としてKJ法による構造化の結果及び選択式(4件法)アンケート調査結果をその対象とした。

選択式(4件法)アンケート調査結果
(有効回答数37名)

表1 選択式アンケート調査4件法による結果

		そう思う	だいたい そう思う	あまり 思わない	思わない
1	調査研究がどのような事をするのか最初はわからなかった	19	8	9	1
2	調査研究の話を聞いて、わくわくした	3	19	14	1
3	調査研究は楽しそうだなと思った、興味関心を持った	9	15	12	1
4	テーマを決めるのが大変だと思った	20	5	8	4
5	テーマを決めるのが楽しみだった	4	21	10	2
6	テーマを決めるのはわりと早かった	13	13	10	1
7	自分でテーマを決めることに調査のやりがいを感じた	12	20	4	1
8	研究目的を決めるのにいろいろと頭を思い巡らした	17	12	8	0
9	研究目的はどちらかといえばすなりと決まった方だ	13	10	14	0
10	調査内容をネットや本などで調べるのが楽しかった	13	17	7	0
11	調査内容を調べていくうちにさらに興味がわいた	24	11	2	0
12	調査内容を調べていくうちにさらに理解が深まった	28	7	2	0
13	調査は主にネットで行った	29	7	1	0
14	自分で決めたテーマについて調査するのが楽しかった	19	15	3	0
15	他の授業にはない調査研究独自の面白さ、やり甲斐があった	14	13	10	0
16	調査内容をまとめるのが楽しかった、充実していた	13	18	6	0
17	調査内容をまとめるのは大変そうだったが、とてもためになった	18	15	4	0
18	まとめと考察を考えることが頭の整理につながった	16	14	7	0
19	まとめと考察はどちらかといえばすぐに書けたほうだ	10	10	11	6
20	調査研究で研究テーマの目的が明らかになった	16	19	2	0
21	レポートを書くのはどちらかといえば楽しい方だ	9	7	15	6
22	起承転結など、レポートの書き方が理解できた	9	19	8	1
23	目的、まとめ・考察が明瞭であり、レポートの完成度は高めの方だ	3	14	17	3
24	プレゼン資料(パワーポイント)の作成には力が入った	23	10	4	0
25	プレゼン資料(パワーポイント)の作成は比較的楽しかった	20	10	7	0
26	プレゼン資料の作成はためになったし、今後、活用できる	19	16	2	0
27	研究発表のプレゼン資料の作成方法が理解できた	21	12	4	0
28	プレゼン発表はどちらかといえば楽しいと思った	10	15	12	0
29	レポート作成全体を通して(経験して)良かった	25	10	2	0
30	プレゼン資料作成全体を通して(経験して)良かった	23	12	2	0
31	プレゼン発表全体を通して(経験して)良かった	26	9	2	0
32	調査研究全体を通して(経験して)勉強になった、ためになった	24	12	1	0
33	調査研究はレポートを作成する力がついた	13	18	6	0
34	調査研究は情報収集能力、情報をまとめ活用する能力がついた	16	16	5	0
35	調査研究はプレゼン発表力、伝達力が身についた	10	22	5	0
36	調査研究で学習した経験は今後活用することができる	21	16	0	0
37	調査研究はとても役に立つ授業だと思った	18	14	5	0
38	調査研究を学習して良かった。充実感があつた。達成感があつた。	17	17	3	0

1) 最初の意識

研究発表終了直後にとったアンケート調査（選択式及び記述式）によると、「調査研究がどのようなことをするのか最初はわからなかった」が（そう思う、だいたいそう思う合わせて73%）。教員から説明を聞いて「興味を持った、楽しそうだなと思った」の設問に、そう思う、だいたいそう思うと回答したのが、全体の65%であった。生徒は当初「調査研究」についての知識がほとんどなく、説明を聞いて楽しそうだという意識を持ち調査研究に興味を持ち始めたと考えられる。

2) テーマ決定

テーマを自らが決定しなければならないことに、68%の生徒が大変さを感じ、テーマを決定することが楽しみだと感じた生徒が68%存在する結果となった。これは、テーマ決定は大変そうだけれど自分の好きな分野、興味関心がある分野に関するテーマを決めるので楽しみでもあるということではないだろうか。教師からテーマを提示するのではなく生徒自身に考えさせ決定させることが生徒の意欲を高めることに繋がると考えられる。「自分でテーマを決定することに調査の遣り甲斐を感じた」の設問では、86%の生徒がそう思う、だいたいそう思うと答えている。

テーマを決定するのに要した時間は、「わりと早かった」という生徒は全体の70%であった。テーマ決定には、当初戸惑いや難しさが多少あったようだが、生徒自身にとって身近な関心のある事なので意外と早めにテーマが決められたようである。

3) 研究目的

テーマ決定後に研究目的を決めるが、「研究目的を決めるのには色々と頭を思い巡らせた」の設問では、78%の生徒がそう思う、だいたいそう思うと答えている。研究目的を文章化するのに色々と思考力を働かせたが、62%が比較的すんなり決まったと答えている。

4) 調査方法

調査方法は、主としてインターネット（選択式⑬）で調べた生徒が圧倒的に多く、次いで新聞記事や書籍（選択式⑩）であった。生徒は、ICTを有効に活用していたことがわかる。

5) 調査内容

生徒自らテーマを決定し、その目的を明らかにするために調査探究学習を実施した。探究の過程で意識の変化が見られた。

調査の過程で、「さらに興味がわいてきて理解が深

まった。」の設問では、そう思う〈そう思う・だいたいそう思う：以下、そう思う〉が95%となり、調査しながら探究していく過程の中で興味がわき、さらに能動的に探究していく意識へと繋がったものと考えられる。

「自分で決めたテーマについて調査するのが楽しかった」の設問では、そう思うが92%であった。教師が与えたテーマについて調査させるよりも、生徒自らテーマを決定し探究する方が、生徒が主体的にかつ積極的に探究する姿勢がみられた。自分の興味関心がある分野や将来へ向けてのテーマを自分で決定しているので、より深く探究しようとする精神が芽生え、自主性を保持しながら探究し続けられたと考えられる。このことは、『a楽しいと思える調査研究』の中の【1 自分の好きなこと興味関心のあることについて調べていく内にその楽しさがわかってきました。】からも伺える。

「調査内容をまとめることが楽しかった、充実していた。」の設問では、84%がそう思うと答えており、「大変そうだったがとてもためになった。」が89%であった。生徒は、テーマを自分で決めたことを調査し探究するプロセスで、より興味関心を持ち、さらにより深く探究するようになっていったと考えられる。『a楽しいと思える調査研究』の【25情報収集をしていく中で自分自身に知識が身についていると感じられそのことが楽しくなってきました。】や、【22沢山の情報を自分の言葉でまとめるのは時間がかかりましたが完成時には達成感がありとても遣り甲斐を感じました。】から、楽しさと同時に達成感や遣り甲斐を感じていたことが理解できる。

まとめと考察を文章化することについて、直ぐには書けなかったがそれを考えることで頭の整理につながった。まとめと考察を直ぐに書けた人が54%と過半数を超えているが、文章化することで頭の整理につながった人が81%と多数であった。多くの情報をテーマに合わせて取捨選択してまとめていく作業はなかなか難しく直ぐにはできないが、文章化することで頭の整理に繋がり起承転結のあるレポートが完成できたと考えられる。生徒は、講義形式の授業では考えてまとめるという作業を行う機会が少なかったため、レポート作成には、最初は難しいと考えていたようだが、一つ一つ真剣に取り組むことによって文章化ができたものと考えられる。

6) プレゼン発表資料作成

プレゼン発表用の資料はパワーポイントで作成した。生徒は思い思いの工夫をしながら資料を作成していた。

「プレゼン資料作成には力が入った。」は、89%がそう思うと答え、「作成が楽しかった。」は、81%が楽しかったと答えている。生徒は全般的にレポート作成(43%が楽しかったと答えている。)よりプレゼン資料作成の

方が楽しみながら作成していたことが伺える。プレゼン資料の作成について、「プレゼン資料の作成はためになった。今後活用できる。」は、そう思うと答えた生徒は95%であった。

近い将来、おそらくほとんどの生徒が進路先でプレゼン発表する機会が訪れるであろう。この授業を通して、資料作成の面白さや楽しさを実感し、その知識や技能が身についたことが理解できる。

7) プレゼン発表

自己のプレゼン発表は、比較的多くの生徒が人前で発表することに抵抗を感じており苦手意識を持っていた。が、発表後はその意識がチャレンジ精神に変化していったことが次の点から伺える。「プレゼン発表はどちらかといえば楽しいと思った。」の設問について、68%がそう思うと答えている。『e 苦手意識とチャレンジ精神』【24 苦手なこともひとつひとつ向き合ってみると意外とやり遂げられるようになったので、まずは挑戦してみようという気持ちになりました】【13 発表前は難しくて緊張すると思っていましたが、発表後は楽しいと思うようになりました。】から、発表前の苦手意識が発表後には、機会があればまた発表してみたいという意識の表れが伺える。経験が、苦手だったことを克服して自己の自信に繋がったものと考えられる。

では何故そのように意識が変化したのだろうか。発表の準備段階で、『f 伝えることの大切さ』【29 わからない言葉があれば調べて噛み砕いて言い換えたり、どうすれば皆に伝えられるのかを考えて行いました。】【9 自分のことばで伝えたいと思うようになりました】から、人前で発表するには緊張や不安が伴うものであるが、それらを跳ね返すだけの準備をしっかりとしていたことが伺えるのである。つまり、その発表の準備段階で伝えることの意義や大切さを認識したことで発表に意欲的になったと考えられる。

「プレゼン発表全体を通して（経験して）良かった」の設問に、そう思うが95%であり、自分が決定したテーマについて調査研究をして発表することに意義と充実感があったことが伺える。

8) 他者の発表から学んだこと

他者の発表から色々なことが見えてきた。『他者の発表から深まる知識』【14 他者の発表を見て今まで見えてこなかったが見えてきて色々なことを幅広く学習することができた。】【7 他人の発表を聞いてそれまで全く興味がなかったことにも関心が持てるようになり、沢山の情報を知ることにより色々な角度から物事を見れるようになりました。】とあるように、生徒は、他者の発表から

幅広い教養や深い知識を身につけ、多くの情報を吸収した。そして、新たな発見と新たな視点で物事を見ることができるようになっていったと考えられる。このように物事を多面的にみる素養は、社会人として必要不可欠な要素であると言える。

自己のテーマについての探究心とそこから深く学ぶ姿勢、向上心の他、他者の発表からもまた色々な知識を吸収し、それまで持っていなかった概念や、既存の概念と結びつけ新たな発見をし新たな視点で見ることができるようになったと考えられる。

9) グループディスカッション (GD) 振り返り

研究発表後、1 グループ7人～8人のグループを5グループ作り、各グループで振り返り（リフレクション）のグループディスカッションを実施した。GDは、調査研究での一連の学修を振り返り、司会進行役・書記記録役・まとめ発表役の役を作り、グループごとの発表を全員の前で実施した。その振り返りから見えてきたものは次の通りである。

『d 新たな視点への転換』【21 GDは、それぞれの考え方や価値観の違いを共有することができてとても良い体験になりました。】【16 GDは、他者の意見を積極的に受け入れることができ、自らの考えを見直す良い機会となりました。】【6 GDは、多くの意見を聞くことができ、新たな視点から物事を見ることができるようになった。】GDでの振り返りは、他者の率直な意見を聞くことによって、自己と他者の価値観の相違を共有することができ、そこから新しい思考や感情を発見し、そのことが自分の成長へと繋げる能動的な思考へと転換していることが伺える。

また、【15 プレゼン発表やGDの報告は皆レベルが高く聞き手がわかり易く工夫されていて優れていると思いました。その人達から自分に必要なものを吸収して自分の成長へとつなげていきたいと思いました。】という結果もある。これは、ICTを活用したプレゼン資料作りやレポート作成といった調査研究の際に必要な技能や態度の汎用的能力の他、活動の際に生じる内面的プロセス（認知プロセス・思考）もまた質的に向上していると伺い知ることができるのではないだろうか。

10) 調査研究を学修して何が身についたのか

調査研究を通してどのような能力が身についたと考えられるのか次のように分析できる。

選択式（4件法）アンケート調査から、「調査研究全体を通して（経験して）勉強になった、ためになった」の設問では、97%がそう思うと答えており、全体37名中実に36名の生徒が勉強になった、為になったと答えてい

る。この調査研究の学修を通してほぼ100%の生徒が多く
の汎用的能力が身についたと答えている。では具体的
にどのようなことが勉強になり、どんな能力が身につ
いたと考えられるのか。

『g意識の変化と身についた能力』【11一つのことを
深く探究する力がつきました】【20自分の能力が向上し
たと思います。特に情報を取捨選択しまとめる力や伝え
る力が身についたと思います。】【10自分一人でテーマ決
定からプレゼン発表まで行ったので、最後まで取り組む
力、やり遂げる力がつきました。】とあるように、調査
研究で学修したことによって、インターネットなどから
の多くの情報を収集し、必要なもの正しいと思われるも
のを取捨選択し、それらをまとめて文章化し、プレゼン
資料を作成し、自分の言葉に置き換えてわかり易く伝え
て、皆の前で発表することができた。

そして、そのことが個人の生活に変化をもたらした文
言が次のように存在する。日常生活ではただ単に【32テ
レビやラジオのニュースをただ聞き流していましたが、
最近ではニュースなどに興味をもって耳を傾けている自
分がいます。】。これは生徒の意識が明確に変化したこと
が明らかになった結果である。多くの知識の吸収と生徒
自身の視点の転換、意識の変容によって生徒自身が成長
していったと考えられる。

11) 能動的思考と今後の活用

この授業で学修したことを今後どのように活用してい
きたいと考えているのかが明らかになった。

『4能動的な思考と今後の活用』【5この授業で学ん
だことで、今後生活していく上で自分の反省点を見直
し、相手の良い所を見つけて過ごすことでより良い結果
が出ると考えるようになりました。】【12一生懸命に取り
組んできたので、その一生懸命取り組む姿勢がこれから
も活かせると思います。】【19情報収集能力、文章として
まとめる能力、伝える能力、その難しさもわかり、就職
してから様々な場面で活用できる力だと思いました。】

【28この授業で自分は何を学んだのか、次の課題は何
か、就職後の人生にどう活用するのかを考えることがで
きました。】。このように調査研究の学修は様々な能力が
身につく、深まる知識と新たな発見、新しい視点からも
のごとを見ることができると考えられる。さらには、そ
こで培った経験学修から、それまでの意識が劇的に変化
し、そのことが日常生活の生き方にまで繋げて自己の成
長へと発展させていこうとする能動的思考と活動に繋げ
ていこうとする結果となったのではないだろうか。

これについて、「調査研究で学習した経験は今後活用
することができる」の設問に対して、37名全員がそう
思うと答えている。この授業の学修効果はこの数値を見

ても明らかである。

VI. 総 合 考 察

フィンク (Fink, 2003) は、学生の学習に関する高い
関与 (engagement) と高いエネルギーを特徴とする
「意義ある学習経験 (significant learning experience)」
の理論を提示していることで知られている。

彼は、学習経験を創出するために、どのようにデザイ
ンすれば良いのか、学習目標から授業の構成などを総
合的に論じており、アクティブラーニングの必要性を説
いていて、講義を聴いたりする受動的学習とアクティ
ブラーニングを対比させた。彼は、アクティブラーニン
グは「経験と省察」から構成されており、行動・観察、
実践することが「経験」であり、何を学習しているの
か、どのように学習しているのか、一人で行うのか、
他者で行うのか、を「省察」と位置づけた。

このことを今回の研究に当てはめてみると、経験、
省察、発表、グループでのディスカッション (省察) の
学修活動はまさしくアクティブラーニングの視点に立
った能動的な実践活動といえることができるのではない
だろうか。

本研究は、生徒が自らテーマ (課題) を決定し、その
テーマを明らかにするために調査探究型の学修を実践
した。詳細に調査したことを文章化しレポートとしてま
とめた。そして、生徒がテーマに沿って探究した結果を
発表 (発信) した。発表することで、発表者の意識が変
化し、また他者の発表を聴く (観察やGD, リフレクシ
ョン) ことで幅広い知識が深まる結果となった。

本研究は、受動的学習 (教授パラダイム) を脱して能
動的学習 (アクティブラーニング、学習パラダイム) を
全面的に取り入れた。生徒は学ぶ意欲が高揚し、一連
の探究プロセスの成長過程において、知識・技能だけ
ではなく思考力、判断力、表現力などの汎用的能力を
身につけたと考えられる。単に知識・技能だけではなく、
認知的思考的にもその学習プロセスにおいて意識の変
化が見られ、生徒自身が成長していったと考えられる
のである。

本授業での学修経験は、単に学習内容を理解するとい
うことにとどまらず、学習内容について感じたり、考
えたりこれまで持っていた知識と結びつけたり、応用
したり、個人的・社会的意味をも追究した (溝上, 2014)
授業実践であったと結論づけることができる。

本研究は、アクティブラーニングの視点から授業実
践を実施した。生徒の能動的学修による身についた能
力・思考力・遂行力・発表力などその態度や高い関与
など、大変意義のある学習経験であったと考えている。

さらに、調査結果の中に、人間関係の距離の置き方や関係性作りについてのコミュニケーション能力へと繋がる文章があった。(hの5など)。「…自分の反省点を見直し相手の良い所を見つけて過ごすことでより良い結果が出ると考える…」これはおそらく、生徒自身が人間関係に何らかの悩みを抱えていて、自己の発表、他者の発表、リフレクション(省察)、グループディスカッションを経験して見いだしたことだと推察できる。つまり、この能動的学修は、人間関係作りにも大変役に立つことを示唆していると考えられる。

他方、調査研究の一連の学習を経験して、次の課題を発見したことは、将来に繋げるキャリア教育への意識の変化であると考えられる(hの28)。

VII. 本研究の意義と今後の展望

フィンク(Fink, 2003)の意義ある学習経験論は、知識の習得、技能・態度・能力の開発を超えて、広く人格的・人間的成長にまで及ぶ目標が示されている。

アクティブラーニングは、知識習得以上の活動や認知プロセスの外化を伴う学習を目指すと考えられるし、そのような学習を通して身につける技能や態度(能力)が社会に出てから有用であるという考え方にもとづいているといえるのではないだろうか。

本研究で得られた結果とその意義については、「課題研究・調査研究」の課題解決型・調査探究型学習として独自の研究成果があったと考えられる。

生徒に考えさせる思考力を育てる、深く探究させる探究心の育成と最後までやり遂げようとする態度の育成、自己発表と他者発表から学んだ知識と経験、グループディスカッションやリフレクション(省察)から学んだ体験的知識など全てが生徒の人間的な成長へと繋がっているのではないだろうか。

今後、全国の小・中・高等学校でアクティブラーニングが順次導入されていくと考えられる。各学校で創意工夫された能動的な学習パラダイムへの転換を図り、充実した授業実践を展開していくことになるだろう。

引用文献

- 1) 本所 恵(2016). 産業と教育H28 12号, pp 5 - 6.
- 2) 田村 学(2015). (文部科学省初等中等教育局視学

官, 10月の取材にて)

- 3) 山田礼子(2013). 学習成果に繋がるアクティブラーニング(私学高等教育研究所シリーズより), pp 95.
- 4) 溝上慎一(2014). アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換(東信堂), pp 7 - 9.
- 5) 小川 勤(2012). アクティブラーニングと学習成果に関する研究-「山口と世界」を通して得られた知見と課題-山口大学紀要論, pp25.
- 6) Fink, L. D. (2003). Creating significant learning experiences: An integrated approach to designing college courses. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- 7) 木村 充, 山辺恵理子, 中原淳(2015). 東京大学-日本イノベーションセンター共同調査研究高等学校におけるアクティブラーニングの視点に立った参加型授業に関する実態調査2015: 第一次報告

参考文献

- 1) 川喜多二郎.(1986). KJ法-渾沌をして語らしめる(中央公論社)
- 2) 能勢保幸(2011). 教育実習経験による視点の変化とそれが教材研究に及ぼす影響について-半構造化面接法による「語り」データの分析から-. 北海道心理学研究第34号
- 3) アクティブ・ラーニングの視点と資質・能力に関する参考資料(平成28年2月24日, 教育課程部会 総則・評価特別部会)(平成28年2月, 教育課程部会, 産業教育WG資料7)
- 4) 主体的・対話的で深い学びの実現(アクティブラーニングの視点からの授業改善について(イメージ)(案)(平成28年度5月9日, 教育課程部会 高等学校部会資料8(会議後修正))
- 5) 次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ(案)(平成28年8月19日教育課程部会 教育課程企画特別部会資料2-1)
- 6) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて~生涯学び続け主体的に考える力を育成する大学へ(答申)~(平成24年8月中央教育審議会)
- 7) 中央教育審議会教育課程部会「審議のまとめ」アクティブラーニングの3つの視点(平成28年8月26日)